長崎県軟式野球大会の運営について

2016（平成28）年以降の県大会から適用

１．参加について

1）支部代表チームを必ず出場させねばならないということはない。
2）組み合わせ抽選後に棄権しないこと。棄権した場合は主管支部に参加料を納入のこと。
3）一旦棄権を申し出たチームは、いかなる場合でも復活出場はできない。
4）県代表を得たチームは、必ず全国あるいは九州大会に出場すること。
5）全国あるいは九州大会の日程が順延となり、棄権したチームは次年度の同大会予選の段階から出場することはできない。

２．開会式について

1）県選手権など開会式が実施される大会では、開会式に９名以上参加すること。
2）天皇賜杯、高松宮賜杯、西日本大会などの中央大会は、10名以上参加しないと棄権とされる。

３．試合方法について（学童・少年を除く）

1）Ａクラスの大会を除き準決勝戦までは７回ゲームとする。決勝戦（代表決定戦）は９回ゲームを原則とする。但し日没、降雨のおそれがある場合、または対戦する両チームが希望すれば７回ゲームとすることができる。
2）コールドゲームは得点差による場合、準決勝戦までは５回以降７点差とし、決勝戦（代表決定戦）は７回以降７点差とする。５回（７回）を完了して日没や降雨等で試合が継続できない場合も適用する。
3）５回（７回）を未完了の場合はノーゲームとせず、特別継続試合とする。但し特別継続試合での得点差によるコールドゲームもある。
4）大会運営上、県連盟主催の大会（Ａクラスの大会を除く）並びに県民体育大会において、二回戦までは１時間30分を超えて新らしいイニングに入らない。同点の場合はタイブレーク方式で決着をつける。
5）前４項の適用に当たっては原則的に５回を完了していなければならないが、大会運営上、県連盟特別規則として「５回に到達していなくても新しいイニングに入らない」を設ける。
6）時間の区切りは１時間30分に到達した時点で先攻チームが勝っている場合はその裏の回まで行う。後攻チームが勝っている場合、先攻チーム攻撃途中のときはその回の終了までとする。
7）準決勝戦までは７回を終わって同点の場合、８回から直ちにタイブレーク方式を適用し、決勝戦は２回を限度に通常の延長戦を行い、なお勝敗が決しない場合は12回からタイブレーク方式で決着をつける。
8）タイブレーク方式の攻撃は継続打順で行う。選手の交替は攻守とも認められる。

【Ａクラスの大会】

9) すべて９回ゲームとし、準決勝戦(リーグ戦方式を含む)までは９回を終了して同点の場合は10回から直ちにタイブレーク方式で決着をつける。

10) コールドゲームは得点差による場合、７回以降７点差とする。７回を完了して日没や降雨等で試合が継続できない場合も適用する。

11) ７回を未完了の場合はノーゲームとせず、特別継続試合とする。但し、特別継続試合での得点差によるコールドゲームもある。

12) 大会運営上､準決勝戦(リーグ戦方式を含む)までは２時間を超えて新しいイニングに入らない。同点の場合はタイブレーク方式で決着をつける。

13) 決勝戦は９回を終了して同点の場合は、２回を限度に通常の延長戦を行い、なお勝敗が決しない場合は12回からタイブレーク方式で決着をつける。

４．学童・少年の試合方法について

1) すべて７回ゲームとする。

2) 打順表の提出は、その日の第１試合は開始予定時刻の30分前までに、第２試合以降は前試合の４回終了時に監督と主将が大会本部に提出。登録原簿と照合の後、球審立会いのもと攻守を決定する。

3) ベンチに入れる人員は、登録されユニフォームを着用した監督30番、コーチ29番・28番および選手20名以内と、チーム代表者、マネージャー、スコアラー、トレーナー(有資格者)各１名とする。

4) 投手の投球制限を設ける。肘・肩の障害防止を考慮し、１日７イニングまでとする。但し、タイブレーク方式の直前のイニングを投げ切った投手に限り一日最大９イニングまで認める。

5) ５回以降７点差がある場合は、コールドゲームとする。

6) 決勝戦を除き１時間30分を超えて新しいイニングに入らない。同点の場合は２回を限度にタイブレーク方式で決着をつける。なお勝敗が決しない場合は抽選とする。

7) 決勝戦は７回を完了して同点の場合は、投手の投球制限を遵守の上、勝敗が決するまでタイブレーク方式を続行する。

8) タイブレーク方式、日没等の取り扱いは一般と同様とする。

この取り決めは、全日本軟式野球連盟が発行する『競技者必携』の改訂に伴い随時変更する場合がある。